

## 『三国志玉璽伝』における説白及び唱詞のディスコース

輪田 直子\*

### Discourse of *San guo zhi yu xi zhuan*

Naoko WADA\*

\*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies, Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580, Japan

#### はじめに

『三国志玉璽伝』（以下『玉璽伝』）は、明清期に中国江南で流行した語り物の弾詞作品で、制作年代が残存作品の中ではかなり初期に当たること、恋愛物や世話物が主流の弾詞にあってその題材が三国志に取られていることなどから、しばしば言及されてきた作品である。

この作品は、1986年に中州古籍出版社から校点本が出版された<sup>(1)</sup>ことにより、現在では手軽に目にするのが可能になったが、その底本は鄭州市図書館が1950年代に蘇州の古書店から購入した<sup>(2)</sup>という清・乾隆年間（巻によって刊行年が異なり、巻二では乾隆元年（1735）、巻二十には乾隆二十年（1755）の記載がある）の抄本（全20巻）であり、現在、『玉璽伝』のテキストとしてはこれがほとんど唯一のものと言ってもよい<sup>(3)</sup>。

『玉璽伝』の内容は、大小様々な異同はあるものの大筋は『三国志演義』（以下『演義』）を踏襲しているため、『玉璽伝』は『演義』をもとに改編されたものであるという前提で、では則ったのはどの系統のどのテキストなのかということについて、これまでにいくつかの見解が発表されている。校点本の編集者らは、まだ『演義』の版本研究が途上であったこともあり、当時にあつては多くの版本の中で刊行が最も古く、そこから各種の版本が派生していったとも考えられていた明の嘉靖本を主な対象として検討し、清の毛宗崗本に比してその近似性を指摘し、嘉靖本も含めた明代のある版本に依拠したであろうと推測している<sup>(4)</sup>。陳遼氏は、『玉璽伝』の説白やエピソードが小説の二つの版本系統（三国志伝系統と通俗演義系統）のいずれとも大きく異なることから、『玉璽伝』の基

づいた底本は羅貫中の著した原本である可能性が高いとする<sup>(5)</sup>。これに対し、龔敏氏は各版本の検討の結果、底本としては明代の黄成甫本が最も可能性が高いとし、嘉靖本や原本が底本であるという説を否定する<sup>(6)</sup>。ちなみに、黄成甫本は中川論氏の版本系統に従えば、「二十卷簡本系諸本」（すなわち「関索」系）に属し、嘉靖本は「二十四卷系諸本」（すなわち「花関索」系）であり、両者に大きな懸隔のあることが指摘されている<sup>(7)</sup>。龔氏の検討過程は説得力に富み、テキスト依拠の方向性としてはこの黄成甫本が最も可能性が高いと考えてよいと考えられる。

譚正璧『評彈通考』<sup>(8)</sup>所引の「三国志玉璽伝」の項では、「一般的に弾詞は、才子佳人の結婚にまつわる物語を主な題材としているため、歴史的な物語において英雄を描写する際にのみ、その雰囲気は異なり、どちらかと言えば評話に適したものとなっている。しかし、かつて私が読んだことのある『三国志玉璽伝』は、…かなり原始的でいまだ文人の改編したことのない三国故事である。」と述べ、その題材が弾詞としてはかなり異色のものであることを強調している。『演義』には見られず、『玉璽伝』に見られるエピソードについては童万周氏以降詳細な報告があるが、これらに共通して指摘されるのは、『演義』ではほとんど存在感のない女性に関する描写の豊富さであり<sup>(9)</sup>、またそのことにも多分に影響を受けた各人物の心理描写の細密さである。

弾詞の細密な描写については、古くは鄭振鐸が「ある婦人の靴の紐がほどけたため、俯いて結ぼうとするが、二晩上演しても、婦人の靴紐はまだ結べていない」<sup>(10)</sup>という笑い話を紹介し、『紅樓

\*石巻専修大学人間学部人間文化学科

夢』や『金瓶梅』などの比較的小説な描写を特徴とする近代小説と比べても突出した細緻な描写を指摘している。張弦声が「『玉璽伝』の中で『通俗演義』とも似た戦闘シーンは、『通俗演義』とは異なる女性の悲喜の描写にやや劣る」<sup>(11)</sup>と評するように、弾詞の表現の特徴は『玉璽伝』においても遺憾なく発揮されていると言える。

さて、弾詞の説唱形態に「叙事体」と「代言体」の二種が存在することは、従来の先行研究で指摘されてきたことである。叙事体とは語り手が三人称で物語を語っていく形式であるのに対し、代言体は演劇のように語り手が登場人物になりきり、その口調を借りて一人称で物語を語る形式であるが、上演のみならず、このような形態の違いはテキストにおける文体の違いとして看取される。「代言体」のテキストが刊行され始めるのは清の乾隆年間（1735～1795）であり、その後の嘉慶年間（1796～1820）の活況につながっており、それ以前のテキストからは「叙事体」の体裁を取るものしか見つかっていない<sup>(12)</sup>。この点について『玉璽伝』について再度確認してみると、『玉璽伝』の抄本には乾隆元年から二十年（1735～1755）の記載があり、この期間に筆写されたものであると考えられるが、その文体から言ってもこの作品の「叙事体」という形式が、テキストとして残る弾詞としては初期のものであろうことを示している。

筆者はこれまでこの「叙事体」と「代言体」という二つの文体について調査し、特に代言体弾詞が一見すると戯曲の脚本の如き体裁を取る中で、ひととき存在感を放つ語り手の言説が、作品の中でどのような効果を上げているかという点について検討を重ねてきた。特に、代言体の萌芽期に執筆されたと考えられる叙事体との混合体とも言うべき『何必西廂』では、他の弾詞作品では類を見ない饒舌な語り手の言説（表白）が、筋の説明から目につくのであるが<sup>(13)</sup>、一方『玉璽伝』のような基本的に全編語り手の言説となる叙事体弾詞においては、その饒舌な心理描写が語り手の本領を発揮するコンテンツであると言える。本論では、『演義』という大いに人口に膾炙した小説を下敷きにした弾詞作品が、その特性を生かし、どのようなディスコースを取るのかについて考えてみたい。

## 1. 少ない説白

『玉璽伝』は全二十巻、約38万字からなり、弾詞としては中編作品であるが、その大部分は七字句の唱詞<sup>(14)</sup>であり、散文で語られる説白部分は約19,000字、全体の約5%に過ぎない。厳密に分別すれば、唱詞、説白の他に小説に登場する詩詞、上奏文、書信などの部分も存在しているが、そのほとんどが字句や順序など些少の異同が見られるのみで、概ね演義のいずれかのテキストに依拠していると考えられるため、龔氏や董万周氏が依拠テキストの考証する際にも、主にこの詩詞などを検討対象としている。換言すれば、弾詞としてのスタイルの検討対象としては、これらの要素を含める蓋然性はないであろう。

それでは、それ以外の説白部分について検討してみる。まず、量的に整理してみると、次の表のとおりとなる。頁数は校点本による。

一見して明らかなおと、物語の後半における説白は減少傾向にある。巻12で6箇所を数えるが、その後はごくわずかな叙述に留まり、最後の

|     | 総頁数 | 説白の箇所数 | 文字数（概数） |
|-----|-----|--------|---------|
| 巻1  | 30  | 5      | 910     |
| 巻2  | 26  | 6      | 1,896   |
| 巻3  | 21  | 4      | 728     |
| 巻4  | 27  | 4      | 1,040   |
| 巻5  | 23  | 4      | 910     |
| 巻6  | 27  | 5      | 1,196   |
| 巻7  | 24  | 4      | 936     |
| 巻8  | 29  | 6      | 1,950   |
| 巻9  | 26  | 4      | 1,118   |
| 巻10 | 23  | 2      | 572     |
| 巻11 | 25  | 2      | 338     |
| 巻12 | 26  | 6      | 1,586   |
| 巻13 | 23  | 3      | 390     |
| 巻14 | 23  | 1      | 130     |
| 巻15 | 30  | 2      | 442     |
| 巻16 | 22  | 2      | 494     |
| 巻17 | 23  | 2      | 468     |
| 巻18 | 24  | 1      | 338     |
| 巻19 | 23  | 1      | 234     |
| 巻20 | 24  | 0      | 0       |

巻20ではついに説白は全く用いられなくなる。

最後に説白が多用される巻12では赤壁の戦いが開始し、巻13まで続く。その後、巻14では呉が劉備の命を狙って、孫権の妹(『玉璽伝』では万金との名が付与される)との婚儀を餌に呼び寄せたところが、意に反して二人の婚儀が成立してしまうという一段が語られる。一連の劉備方と孫権方との対峙を描く中で、巻12から13にかけては『演義』でも詳細に描かれる赤壁の攻防、一方、巻14のエピソードも既に『演義』において詳細な駆け引きが描かれてはいるが、『玉璽伝』ではそれに加え婚姻の当事者である劉備と万金の情緒纏綿たる様子を延々と語っていく。エピソードの性格の違いは両者で明らかであり、前者が『演義』の表現をそのまま援用した事情とともに、『演義』には描かれない男女の物語を紡ぐ後者が説白での描写に頼らず、唱詞のみにて継いでいこうとする意図を読み取ることは容易であろう。

巻20に至っては説白は全く存在しない。『演義』の物語を基本的には襲う『玉璽伝』であるので、巻20の最後は三国一統で収束する。しかし、曹操ですら巻19に至ってようやく死亡、『演義』では曹操より先に死亡する関羽はその後の巻20まで生き延び、最後に劉備らが続々と死亡した挙げ句、天界の星の生まれ変わりであった彼らが揃って天界へと帰って行くというエピソードが掉尾を飾る。さらにその間には孫万金の最期まで組み込まなければならないという状況にあっては、とても悠長に『演義』を援用しての説白を披露するゆとりがなかったと見え、三兄弟死後の諸葛亮、姜維の活躍もわずかに唱詞一句ずつで触れられるのみとなる(「孔明六出祁山戦、姜維九次犯中原」)。

そもそも弾詞が誕生した際の形態、或いは言い方を変えればテキストの残る初期の弾詞の形態は全編唱詞が一般的であるので<sup>(15)</sup>、乾隆初期に書写された『玉璽伝』においてもその大部分が唱詞で説白が少ないことは、弾詞変遷の流れから言っても不可思議な状況ではない。

それでは、その説白はどのような場面で配置されているのか、また、前後の唱詞との関係とその機能について、章を改めて検討してみたい。

## 2. 説白と唱詞の「複用」

ところで、中国の語り物においてはいわゆる「複用」(同内容を説白と唱詞の両者で描写し繰り返す技法)と、「連用」(説白と唱詞の両者が連続して描写され内容の重複はしない技法)という二つの技法が存在する。中国の語り物に、詞曲などの長短句による「楽曲系」と、主に七言の齊言句による「詩讀系」の二つの潮流があり、中でも、ある一定のメロディーの緩やかな変化に合わせて歌詞を紡いでいく「板式変化体」という体裁をとる「詩讀系」が優勢であったことは葉德均が提唱して以来定説となっているが<sup>(16)</sup>、筆者は以前、その優勢ではなかった「楽曲系」として数少ない残存作品である『董解元西廂記諸宮調』(以下『董西廂』)について説唱形態を検討した際に、この「複用」と「連用」という視点から判断すると、明らかに「複用」が主流となっていることを指摘した<sup>(17)</sup>。諸宮調という芸能は、その名の通りいくつもの宮調(音階)、いくつもの曲を駆使し物語を重厚に語り継ぐ体裁であり、説白と唱詞の「複用」はもちろんのこと、唱詞のみでも同内容を曲の転換によってメリハリをつけて繰り返し描写していき、いわばその多彩な転換が作者の腕の見せ所であったわけであり、上演を聞きに来た聴衆にとっては聴き応えのある作品に仕上がっていたはずである。その一方で、テキスト化された作品を読む際には、メロディーを度外視してしまえば内容の重複が少々気にかかる。

弾詞『玉璽伝』は「詩讀系」の語り物である。そして、今挙げた「複用」「連用」という説白と唱詞の関係性に照らすと、圧倒的に「連用」の叙述形態を取ることが多い。全20巻に書信や上奏などを除いた説白が64カ所存在するが、このうち説白と前後の唱詞の間で内容的にほぼ完全な重複が見られる「複用」はわずかに2例のみである。一部重複が18例、残りの44例では内容が繰り返されることはほとんどない「連用」の形式を取っている。そこで、まずその例外的な「複用」の例を見てみよう。(2字下げた部分を説白とする)

### (例1)

説張飛、字翼德、世居涿郡、頗有田莊、売酒屠猪、結識天下好漢。一身武芸、能敵万人。性直堅剛、敬弱欺惡。此日見玄德嘆息、

大叫曰：“大丈夫不与朝廷出力，何故長嘆耶？”玄德回頭看他：生豹頭環眼，燕頤虎額，身長八尺，声若巨雷，行如奔馬，氣象英雄，出言豪爽。只上前施礼。張飛見玄德一表非俗，有天子之相，張飛大喜，上前相見。各通名姓，便留進店，小酌三杯，去議論投軍之事。

却說張飛人一个，世居涿郡長生身。字称翼德最豪爽，頗有田莊牛馬群。身中武芸人無比，生性堅剛不怕人。逢善不欺最敬重，見惡相持不放行。平生慷慨最義氣，只結江河義胆人。習成八陣飛槍法，要代皇家立大勛。不得逢時無薦拔，殺猪賣酒作營生。此時遇見劉玄德，各各留心相愛深。同歸店內來飲酒，各訴心中志氣情。共通姓名來歷事，商量同欲去投軍。

(卷1)

場面は三義兄弟の出会いのシーン、張飛の登場である。全作品中、一番最初に語られる説白となる。唱詞と比較すると、説白には直接話法のセリフが挿入されているが唱詞にはなく、また唱詞では張飛の人格付けをより具体的に行っていることが見て取れるが、内容はほぼ一致する。ちなみにこの場面の『演義』の描写は以下の通りとなる。

中平元年，涿軍招軍時，玄德二十八歲，立于榜下，嘆声而回，後有一人厲声言曰：“大丈夫不与国家出力，何故長嘆耶？”玄德回頭，見其人形貌非常，身長八尺，豹頭環眼燕頤虎鬚，声若巨雷，勢如奔馬。玄德与此人同入村中，問其姓名。其人答曰：“姓張，名飛，字翼德，世家涿郡，頗有庄田，賣酒屠猪，好結天下壯士。見公看榜何故長嘆？”玄德曰：“吾乃漢室宗親，姓劉，名備，字玄德。今聞黃巾賊却掠州郡，恨独力不能掃除耳。”飛曰：“正合吾機。”正坐飲酒。

(黄正甫本 卷1「祭天地桃園結義」)

『玉璽伝』の説白との最も顕著な違いは、『演義』では時系列に沿った描写がなされている点で、玄德が不意に聞こえてきた声のする方を振り返ると、そこに尋常ならざる様子をした男がおり、姓名を問うと張飛という者で、その来歴を簡単に語る、という極めて常識的かつ合理的な展開になっている。片や『玉璽伝』は掲出の直前の唱詞で、玄徳の嘆息に大声で喝を入れる人物が現れたところ、続く説白でいきなり「さて張飛は、字翼德、

代々涿郡に住まいし…」と種明かしをしてしまう。これは「張飛」という人口に膾炙した、民衆に最も高い人気を誇り、おそらく聴衆にとっても特別思い入れの深い人物がこれから登場する、ということのを特に喧伝した描き方であろうと考えられ、さらに念を入れて、「複用」という方法により、唱詞でも同様の描写を繰り返している。その後も、玄德が玉璽を介して深い縁で結ばれる邢姣花とのエピソードを導くために創作されたであろう、その父である山賊の頭目（もとは朝廷の將軍を務めていた）・邢彪が寨を築く黒松林で玄德と朝廷軍が闘う話が挿入されているが、この場面で救助に向かうのも張飛である。ただし、巻1以外での張飛の存在感はさほど圧倒的なものではなく、かえって登場ではさほど注目を浴びることのなかった関羽は以降『演義』と同様の活躍を見せ、『演義』では削除された「斬貂蟬」のエピソードなど関羽の見せ場は増える傾向にある。

(例2)

說孫乾入見吳侯，再稟玄德之命接夫人歸蜀。吳侯曰：“西川迢遠，夫人安得行之万里。倘途中有阻，如之奈何？必待玄德親自來迎，方与行耳。若遣軍兵來接，決然不肯。”設宴款〔待〕孫乾，収其礼物而發回。孫乾欲請夫人拜見，吳侯不許。乾只得回去。

吳侯不許夫人見，說与孫乾聽事因：玄德遣公來接妹，程途万里不堪行。既然不負夫妻義，何不親自到臨。可笑甚心不思情，妻儿安得托閑人。迢遠山川非易到，途中何處沒強人？我妹一身遭毒手，玷辱東吳怎理論。汝当速轉西川去，玄德親來我發人。孫乾不敢多饒舌，拜別吳侯便出厅。金寶兩車空送与。夫人不得信和音。孫乾煩惱回程去，還上西川見主人。

(卷17)

この例は、孫劉の赤壁以降の同盟関係がほとんど破綻した中で、そもそも両者の和合の象徴として玄德と結婚した万金が、兄・孫権や周善の策で東吳に連れ戻されたため、玄徳の命を受けた孫乾が孫権に言上するも拒絶される、という場面である。

実は、このエピソードは『演義』にはない。『玉璽伝』では玄德を巡る女性に関する描写が実に豊富であるが<sup>(18)</sup>、孫権の妹として玄徳に嫁いだ孫万金との関係においても先述したとおり『演義』

では描かれない結婚生活の内実や、二人のそれぞれの思惑が詳しく語られる。

例えば、玄德は万金を娶る以前に三人の夫人がいたが、いずれも亡くしており、万金についてもまた添い遂げられないのではないかという不安を吐露し、これを受けて語り手は万金が幸薄く、将来皇后になる相にはあらず、と語る（頭婚三个無縁死，続縁甘氏又亡身。偏取緑筠方十載，三遭風雨懷花林。今同此女為夫婦，日後情緣未可憑。他兄面善必成隙，未必姻緣保一生。婦人姣媚終無福，看来不是后妃形。卷14）。また、東呉を逃れて荊州へ来た万金は玄德の息子・阿斗を愛おしみ、その様子を玄德が喜ばしく見守るという理想的な家庭の情景が描かれ、「水魚の交わり」と、一般的には玄德と孔明の関係性について表現する言葉で夫婦を評する（書中不唱呉侯事，聴唱荊州城内因。皇叔夫人心喜悅，双双回軫府厅門。奶娘乳保來參見，阿斗孩儿見母親。夫人見了心中喜，好个孩儿画不成。皇叔半生惟此子，十分看望要成人。夫人愛惜如珍宝，皇叔心中甚喜欣。不見我儿三个月，容顏不覺又精神。府中日日排筵席，娛賀团円日日新。荊州府内多榮貴，洞府仙宮彩画成。夫婦飲娛多快樂，如魚似水過光陰。卷15）。

このような状況で二人は引き離されたわけである。『演義』においては東呉での新婚生活こそは仲睦まじかったものの、荊州へ帰ってからは夫婦の姿は描かれることもなく、万金が東呉へ戻る際も、玄德に対する未練などは述べられない<sup>(19)</sup>。一方『玉璽伝』の万金は自らを月へ帰る嫦娥に喩え、桃源郷にも似た荊州を後にし、この後は夫も他人になってしまうという悲しみを唱う（抛離月殿嫦娥府，離了陽台雲雨亭。今朝出了桃源洞，從此劉郎作路人。浮雲障断天河路，東風吹散武陵春。鸞分鳳拆難相会，鴛鴦飄散不成群。三載恩情今日断，百年夫婦不相親。誰知離了荊州府，不能再過漢江浜。望夫空滴相思淚，變作湘江白浪津。自古姻緣前世定，不由人意怎区分。卷16）。帰呉後も万金が玄德を思い嘆く姿は頻繁に描かれる。その暗い嘆きのうちに日々を過ごす万金にとって、玄德からの使者である孫乾の出現は劇的に差し込んだ一筋の光とも言うべきで、さらにそれが兄の拒絶により儚くも消え去ったというこの出来事は、万金のその後の運命を決する一大事である。この

場面での「複用」はその様な意図での強調の手段であると考えられる。

### 3. 説白のディスコース

張遼氏は、『玉璽伝』が『演義』の『三国志伝』系および『通俗演義』系よりさらに古いテキストを底本と比定した上で、『玉璽伝』の説白76カ所（筆者は含まなかった書信や上奏文を含んだ数）中、『演義』にはないオリジナルのエピソードは、1)後に玄德と結ばれる邢姣花の父・邢彪が登場し、その来歴が語られる（巻1）、2)邢彪の部下が邢彪に張飛が官軍を助けに襲撃してきたことを告げる（巻1）、3)糜竺が妹・糜緑筠と玄德の間の蝶の取り持つ縁について語る（巻4）、の3カ所のみであるとする<sup>(20)</sup>。前章で指摘したように、実は巻14の孫乾のエピソードも『玉璽伝』オリジナルのエピソードなのであるが、それはともかく張氏が指摘するこれら3カ所の説白は、1)には若干「複用」の要素が見られるが、そのほとんどは「連用」によって叙述されている。

例えば3)のエピソードは、徐州の牧・陶謙が親の仇として曹操から襲撃を受けたために、助けを要請された玄德は徐州に出かけ、そこで陶謙の部下である糜竺と知り合い、その妹と婚姻を結ぶという話であるが、そのきっかけとなるのが緑筠の落とした香囊（匂い袋）である。なかなか見つからずにいた匂い袋がなぜか兄の糜竺の手により戻ってくる。一体なぜと問う妹に、兄が説明をする様が唱詞で描かれる。

香囊帶軛家中去，付与姣姣妹緑筠。小姐接得将言問：哥哥何処拾來臨？蝴蝶飛來真作怪，抓去香囊不見形。處處相尋渾不見，落于那處遇兄身。糜竺大兄開口説，一一從頭妹且听。

糜竺は墓参で偶然玄德と関羽に会った時のこと、空中の蝶の一对が玄徳の帽子に止まり、その蝶が匂い袋を携えていた、と説明する。これはきつと縁がある証拠、玄德は人物も立派なので是非に、と妹に結婚を勧めると、緑筠も承知する。

説糜竺謂妹曰：“今日上墳祭掃，遇劉玄德与雲長出獵，我酒与飲之，只見空中飛下一对蝴蝶，歇于玄德帽上，帶一香囊，玄德不知來歷。我見妹儿物，必安姻緣。即与玄德説親，不允。娶婦甘氏，亦系統弦，尚無男女，

玄德年已三十五歳、人品英豪、相貌大貴、妹妹意下如何？兄當贅之。如妹不願、不復再言、別覓良縁。”小姐起身答曰：“故語云、長兄為父、凡事所憑。何必問妹。既有異事、有香裏為証、必是前世之事、妹安敢不從。”竺聽說大喜。

この場面で説白は、緑筠にとって知りたい情報を持っている兄が一呼吸置いて勿体つけて答えを披露する部分になっている。糜竺の言葉は直接話法を取っているため、唱詞で描くより明確性も増し、雰囲気を変える装置としてうまく機能していると言える。

続いて、他の巻に比べ説白の多い巻2、巻8、巻12について見てみる。巻2では6カ所の説白のうち、2カ所が「未知如何？」や「只問因由何以至此哉？」という疑問の言葉で終わっており、聴衆に期待を持たせる効果が生まれている。また、「忽聽鑼声大振、夏侯淵、夏侯惇並樂進引兵來救、救操而去。」「貂蟬領命而退去。」などのように人物がその場を退場して説白が終わるというのもしばしば取られる手法である。これは巻8についても同様で、6カ所の説白中、4カ所が「～而回」「～而別」などこの様式を取る。特に、巻8は関羽が曹操に条件付で降った状況を描いており、関羽が玄德の消息を知るやすぐさま曹操の下を辞し千里の道のりを駆け付ける。その途上で様々な関門が出現してはそれをクリアしていく関羽の様子が、「～而去。」のような言葉を最後に置くことによって全体としてスピード感を演出する効果を上げている。

一方、巻12は先述したとおり赤壁の戦いの場面である。「舌戦群儒」から「苦肉の計」に至る赤壁の前哨戦を描く箇所となっているが、この部分の説白は基本的には『演義』の叙述に拠っている。しかしながら、嘉靖本や黃正甫本の本文とは微妙に字句が異なることがあり、唱詞とのバランスを見ながら、作者が様々な工夫を凝らし説白も配置しているのではないかと考えられる。孫権が初めて孔明に直面し、曹操の軍勢について尋ねる場面を見てみよう。

呉侯茶罷將言説：先生不易受風塵。子敬深談君大徳、孤身深想不能親。今承光過吳中地、請求教益拒曹兵。孔明当下躬身答：不才無學敢沽名。

今朝又辱公身問、荷蒙錯愛過垂恩。呉侯見說微笑：久慕先生智足能。相同豫州征戰事、不知勝負若何能？孔明又手前來告：皇叔安能拒操兵？兵不得千他数万、將止関張与趙雲。錢粮又少城池小、怎敵曹公百万兵。魯肅聞言吃一吓、如何又說這般情。暗暗可惱連叫苦、呉侯又乃說原因。雖然曹兵一百万、不知虛實若何能？

孔明答曰：“曹操破呂布、滅袁紹、平袁術、収北番、定遼東、新服劉琮、水軍歩軍合百〔万〕人、青州向有軍、四五十万、亮以百万言之者、恐驚江東之士耳。”孫権又問曰：“將士知他幾何？”孔明曰：“智足多謀、揚威耀武、何止三千。如亮之輩、車載斗量、不計勝数。”魯肅暗暗叫苦。孫権又曰：“今曹操已平荊州、復有遠図乎？”孔明曰：“自今沿往下寨、整治戰船、旌旗拥蔽数百里、必称図江東待占此地。”孫権曰：“操〔若有〕並吞之意、戰与不戰、請先生一決。”孔明曰：“但恐明公不肯听耳。”孫権曰：“願聞得、但願金石之命。”

(巻12)

唱詞は次のように唱う。「呉侯は茶を飲むと話を始めた、先生は俗世に易々とは染まらぬご様子。子敬からあなたの徳については深く聞いておったゆえ、親しく会えぬことを残念に思っておった。今幸いにも呉の地へお越し頂いたからには、是非曹操の軍勢の防ぎ様をお教え願いたい。孔明は恭しく答える、非才無学の輩が臆面もなく参りました。…」なめらかな会話文で進行していることがわかる。一方、説白ももちろんここは会話体で進行していく。「孔明が答えます、「曹操は呂布を破り、袁紹を滅ぼし、袁術を平らげ、…（その軍勢は）私が100万と言えば、江東の戦士を驚かすに足るでしょう。」孫権が重ねて尋ねます。「將軍はいかほどおろうか？」…」説白はやや簡潔なリズムを保持していると言えよう。

さらに巻12には「攢十字」という十字句の韻文も使用されている。場面は「舌戦群儒」で、そのことが本文中の唱詞で「要知舌戦群儒事、選成十字甚文明。」と喧伝された上で、「張昭同顧雍等一班謀士、邀明公各坐定道却其名。…」という三、三、四のリズムの十字句で歌い出す。「攢十字」は七言句の弾詞作品でも時々見られるが、全編「攢

十字」を用いた作品は主に北方の鼓詞等に見られ、勢いのあるリズム、雰囲気伝える。ここでも女性や恋愛事情などに重点を置いた叙述が目立つ『玉璽伝』にあって、孔明と群儒の丁々発止のやりとりを描くのに打って付けの形式であると言える。延々と続く舌戦を、説白を挟まずに力強い十字句のリズムで語り継ぐことで、三国物語としての従来の雰囲気にも迫る創作となっている。

以上述べ来たった『玉璽伝』における説白の機能をまとめてみると、以下の通りである。

1. 説白は全体の約5%である。
2. 説白と唱詞の叙述は「連用」が主であり、例外的に出現する「複用」では作品中で特に強調すべき話柄、人物について描写される。
3. 説白が多い巻においては、説白の出現に何らかの意図を持たせる工夫がなされる。

#### おわりに一説白を排除した終盤の意図するもの

『玉璽伝』の説白を主に検討対象として、併せて唱詞との関わりについても論じてきたが、一章で確認したとおり作品の後半では説白が極端に減少している。改めて作品の書写年代について考えてみれば、董万周氏によれば乾隆元年から乾隆二十年までかなりの時間差があることが確認される。当初想定されていたであろう制作意図は、おそらく『演義』を素材として大いに活用しながらも、玉璽と玄德を巡る女性という主旋律を響かせる作品、といったところであったはずである。前半部分に関してはこの試みが成功して、内容もさることながらその文体に豊富なバリエーションを見出すことが可能である。ところが、中盤以降、急激に説白が減少する。

実はエピソードの展開自体は、描くべきは十二分に描き、描く必要のないものは大胆に切り捨てるという姿勢が一貫しており、テーマもある程度は鮮明に描き出すことができている。最初にも述べたとおり最後の巻20があまりに急速な終結になってしまっていることで、いかにも尻切れとんぼで終わっているという印象は否めないが、それがかえって作品の個性を抽出することに一役買っていると言えなくもない。

しかし、その叙述形態に目を向けた時に、この急激に減少した説白にはかなりの違和感を覚えざ

るを得ない。例えば、巻19で唯一の説白は、曹操の死を語っている。二章で確認したとおり、作品中で特に強調したい重要なシーンは「複用」で表現することがあるのだが、この場面は唱詞での死に触れる文言は「建安廿五年正月、曹公身喪洛陽城。」と歌った後、この希代の英雄の人となりを詳しく述べていく。一方、説白では曹操の臨終の場面が、『演義』と同様に語られる。その様に見れば、この場面の説白と唱詞は「複用」でこそないものの、それぞれの性格を生かした重厚な描き方として成功していると言える。ところが、そのような叙述方法を後半部分でほとんど取らない『玉璽伝』の後半は、もちろんテーマがより玄德やその他の人物の家庭生活に近づいている側面が明らかであるため、この雰囲気を強調するための措置として説白をそぎ落としていった可能性も完全には否定できないかもしれないが、やはり、前半の雰囲気との齟齬を解消するほどの積極的な根拠にはできないというのが妥当な見方であろう。すなわち、後半部分の説白の減少は、決して意図的なものではないであろう。

後半部分の唱詞の文体をさらに詳細に検討することによって、これらの問題に迫ることができると思われる。この点については、稿を改めて検討したいと思う。

#### 注

- (1) 童万周校点、弦声責任編集『三国志玉璽伝』（中州古籍出版社、1986年12月）。なお、校点者の「童万周」とは童吉永、張万鈞、周樹徳の三氏の連名である。
- (2) (1)に編集として関わった弦声『『三国志通俗演義』与『三国志玉璽伝』』（『殷都学刊』1988年第1期）による。
- (3) 盛志梅『清代彈詞研究』（齊魯書社、2008）附録「彈詞知見総録」では、この他に『中国古籍善本書目・集部』に著録されている「清抄本、20巻」も別種として挙げているが、所蔵箇所が明記されていないこのテキストは、おそらく鄭州市図書館本を指していると考えて間違いないと思われる。なお、鄭州市図書館蔵の抄本は、張弦声『略説手抄孤本彈詞『三国志玉璽伝』』（『現代語文：學術総合版』2011年10期）によれば、2012年に中州古籍出版社から線装二函で影印出版される、とのことであったが、現時点では実現していないようである。

### 『三国志玉璽伝』における説白及び唱詞のディスコース

- (4) 同上(1)「前言」4～8頁。
- (5) 「由彈詞『三国志玉璽伝』談羅貫中的『三国』原本」(『中華文化論壇』2007年第3期)。
- (6) 「彈詞『三国志玉璽伝』の来源和成書時間考略」(『小説考索与文献鈎沈』所収、齊魯書社、2010年9月)。
- (7) 中川論『『三国志演義』版本の研究』(汲古書院、1998年)。中川氏は他に余象斗本などの「二十卷繁本系諸本」を想定する。
- (8) 中国曲芸出版社、1985年。
- (9) 張弦声「劉備的五位夫人—『三国志玉璽伝』中の女性描写」(『黄鶴樓前談三国』所収、長江文芸出版社、2003年10月)他参照。
- (10) 「西諦所藏彈詞目錄」(『小説月報』第17巻号外「中国文学研究号」、1927年)。
- (11) 同上(2)。
- (12) 盛氏は彈詞の文体について、(3)下編「清代彈詞芸術散論」208～221頁において詳述している。
- (13) 彈詞の説唱形態については拙稿「蘇州彈詞における説唱形態の特徴」(『東北大学中国語学文学論集』第1号、1996年11月)、同「清代彈詞需要に関する一考察—車王府藏彈詞をてがかりに—」(『集刊東洋学』第84号、2000年10月)参照。『何必西廂』の文体については同「彈詞『何必西廂』の文体—メタフィクションにおける「議論」」(『石巻専修大学研究紀要』第16号、2005年2月)参照。
- (14) 七字句ではなく、三、三、四の十字句構成の「攢十字」もごく稀に見られる。
- (15) 鄭振鐸『中国俗文学史』(商務印書館、1998年。初版は1938年。)第12章3節に、乾隆39年抄本の残る『繡香囊』が、実際には乾隆期以前に書写されたものであろうと推定され、その形式が全編唱詞であることが述べられている。
- (16) 葉德均『宋元明講唱文学』(上雑出版社(上海雜誌公司)、1953年)参照。
- (17) 拙稿「説唱文学としての『董西廂』」(『集刊東洋学』第76号、1996年11月)参照。
- (18) 同上(9)。
- (19) 毛宗崗本では白帝城に敗走した玄德が戦死した、という誤報を信じ、万金は長江に身を投げる。嘉靖本と黄正甫本ではこの場面は削除されている。
- (20) 前掲注(5)参照。